

北欧神話の天地創造

北欧神話 天地創造

——ユミルの生きていた太古の昔、
海も波も砂も大地も天も草もなく
ただ、大きな淵だけがあつた——

『古エッダ』から「巫女の予言」

北欧神話で語られる世界のはじまりは大地も天もなく、もちろん世界樹ユグドラシルも存在していませんでした。宇宙にはニヴルヘイムの氷とムスベルヘイムの炎があるだけで、人も神もまだ生まれていませんでした。

氷と炎の間にはギンヌンガガブと呼ばれる広く大きな裂け目があり、この場所でニヴルヘイムの氷とムスベルヘイムの炎が激しくぶつかりあっています。氷は溶けて毒の蒸気となつて渦巻き、その中からはじめに男女両性を持った巨人ユミ

ルと牝牛アウンズンブラが誕生しました。アウンズンブラは食事の代わりに大きな氷の塊をなめ、ユミルの食料はアウンズンブラの乳でした。アウンズンブラが毎日なめ続ける氷の塊の中から、不思議なことに人の姿があらわれはじめ、三日後には美しい男性神ブリーが誕生します。

ユミルの体のあちこちからは何人もの巨人が生まれ、中には六つの頭を持つ巨人スルーズゲルミルのような異形の姿をした者もいました。はじめりの神ブリーの息子ボルは巨人の一人、ボルソルンの娘ベストラと結婚しました。この結婚により、ボルソルンとベストラの間にヴィリとヴェー、そしてオーディンという三人の神が生まれたのです。

ときが経つにつれて霜の巨人とその一族は邪

悪さと凶暴さを増していき、三兄弟との関係は悪くなつていきました。そしてついある日、我慢の限界にきた彼らはユミルと戦い、巨人を殺すことに成功。倒れたユミルの傷口から流れ出した血が大地にあふれ、これが大洪水を引き起こしました。この大洪水のために霜の巨人の一族は流されてしまい、ベルゲルミルとその妻だけが生き残りました。

オーディンとヴィリ、ヴェーの三人の神は倒したユミルの体をギンヌンガガブの中心に運び、その体を使って世界をつくることを決めました。

あふれ出た巨人ユミルの血液が低い場所にたまり、それが「海」となりました。この海の中にユミルの肉を置いて「大地」をつくり、骨を山々に、歯や顎の骨を細かくくだいて岩や小石をつくつて、これを大地の上に置きました。次に三人の神は、ユミルの頭蓋骨を持ち上げて「天空」

にすることを決め、アウストリ（東）、ヴェストリ（西）、スズリ（南）、ノルズリ（北）と呼ばれる四人のドワーフを送り出して、ユミルの頭蓋骨を支える役目を与えました。頭蓋骨の中に残っていた脳から雲を、ムスベルヘイムから飛んできた火花を使って太陽と月、星をつくつて天空を飾りました。それから三人の神は宇宙を九つの層に分け、その中心にユミルの大地「マンハイム」が置かれ、ようやく世界ができあがったのです。

このようにして九つの世界をつくり上げたオーディンは、最後に宇宙の中心に世界を貫き支える巨大なトネリコの樹「ユグドラシル」を創造しました。次に広いマンハイムの東の山地を生き残った霜の巨人の国ヨツンヘイムと決め、大地の内側にユミルの眉毛で垣根をつくりました。これは三人の神が乱暴な霜の巨人族を大変に嫌っ

北欧神話 天地創造



世界を支える世界樹・ユグドラシル

北欧神話では世界は九つの層に分かれていると言われています。その九つの世界を支えるのが「宇宙樹」「世界樹」と呼ばれるトネリコの大樹ユグドラシルです。

この木がいつから存在するのかわかりませんが、神々が世界をつくりはじめたときにはまだなかったと言われています。世界は創造された後で大地から芽吹いたトネリコの若木が成長したとも、オーディンが九つの世界を支えるためにつくり出したとも考えられています。

ユグドラシルには三本の根があり、巨大な幹を支えています。この根は三つの世界に伸びており、それはアース神族の国アスガルド、霜の巨人の国ヨツンヘイム、氷に閉ざされた国ニヴ

ルヘイムへと届いています。

アスガルドに届く根のそばには、運命を司る三人の女神ノルニルが守る「ウルズの泉」があります。ここは神々が重要な会議を開く場所でもあります。ウルズの泉にはすべての白い鳥たちの親である二羽の白鳥が住み、神々の心を日々癒しています。

ヨツンヘイムに届く根のそばには巨人ミームルの首が守る「知恵の泉」があります。この泉の水は飲んだ者に知恵と知識を与えてくれるといい、オーディンでさえも欲しがったほどです。泉の底には泉の水と交換されたオーディンの左目と、世界の終わりを知らせる角笛ギャラルホルンが保管されています。もつとも下に位置す

